

実践事例や教材の活用事例等、英語科の先生方に参考にしていただける情報をお届けします。

実践 紹介

「書く力」が「読む力」を育てる(1)

—Writingを核とした英語授業—

富士高等学校附属中
紺野 正典

3回に分け、1、2、3年と段階を追ってWriting力、ひいてはReading力を伸ばす実践をご紹介します。

三年間を通して「書く力」を基盤に「読む力」を育成することを目指し、1年時には「自己紹介」、2年時には「日記」、そして3年時には「意見を述べる」ことをテーマにWritingを指導しています。これは、自ら書いた文や構造は処理が自動化されやすく、それが読解時の負担軽減につながると考えているためです。Writingを要とした指導を通して、最終的には構造化された英文を読む力へと接続するために、既習の文法事項や表現を用いて文を拡張し、トピックセンテンス（話題文）を明示することで、文章の論理構造を可視化することを目標とします。

1年 200語の自己紹介文を目指して、毎月1テーマずつ英作に取り組みます。

●0 理解可能なインプットから発信へ

1学期は、4技能すべての土台になる「音」と「綴り」に焦点を当て、単語をしっかり読む指導を行います。発信は2学期から毎月テーマに沿った自己紹介文を書かせます。英作は、自己紹介を日本語で言わせてから書ける範囲で英語にさせています。毎月、①今月の英作文テーマ（作文記入欄つき）、②前月の英作の優秀作品の紹介、③多く見られた間違いの修正問題を掲載したプリントを配ることで、**出題→（英作文）→『よりよい表現』を知る・誤りを修正する**、という流れを作ります。配布したプリントだけではわからない、という生徒には、申し出させて一対一で指導します。全く書けなかった生徒には、翌月のプリントの良い文を写すよう指導します。これを繰り返し、英文を書き加えていき、3学期の自己紹介文200語を目指します（200語は公立中勤務時で、現勤務校の富士高等学校附属中学校では300語を目標にしています）。この自己紹介の蓄えがあると、3年時にかなり発信できるようになると痛感しています。言語は「実際に使わせてみて初めて力がつく」のです。したがって、中学校英語で優先すべきなのは、4技能を同時並行で均等に扱うことではなく、音と綴りを基盤とした理解可能なインプットを十分に確保し、その上で小さな発信を積み重ねていく学習設計であると考えています。「文法」はその発信を支える「調整装置」として位置づけることで、技能は分断されることなく統合されていきます。

●1 教室に響いた「おっ！」 教師の腕の見せ所（with想像力）

昨年12月の「自己紹介」のテーマは、生徒と一緒に考えて“My Treasure”としました。このテーマに対してある生徒が書いた次の文を良く書けている例として授業で紹介しました。

My treasure is my dog. It is brown and black and white. I got it four year ago. I got it with my family. I play with it every day. Because I love it very much. I walk with it.

ここで、心がけている指導があります。よくあるのは「正しい英文に直してあげる」でしょうか。確かに、文法指導は大事ですが、この英文の文法だけ直して「おもしろい」と生徒は感じるでしょうか。私は英文を以下のように書き換えました。すると… 1年生からは「おーっ」と声が上がりました。

My treasure is my dog, and it is brown, black, and white. I bought it four years ago with my family, so it is very special to me. I play with it and walk with it every day, and I always feel happy. I love it very much. So it is my treasure.

私は、ここに教師の腕の見せ所が生まれると思っています。このように教師が書いて欲しいと願う英文を示すことで、生徒の英語力伸長にもかなり差が出ると思っているからです。

また学習初級者である1年生は、まだ「形容詞」と「副詞」の違い（例えばgoodとwellの違い）がよくわかりません。ですから、私は副詞という言葉を使わないで「alwaysやevery dayみたいな単語を効果的に使えるようになってきたら、それは英語が上手になってきた証拠」などと言って鼓舞しています。そうすることで、品詞も意識するようになってきます。

●2 良い英文に触れることで分析できる力がつく—3年生の分析

私が書き換えた英文は、先生方の中には、もしかしたら「難しすぎるのでは…」と思う方もいるかもしれませんが、私はPaul Nationが“*Quantity of input matters.*”と繰り返し強調するように、良質なインプットなしに良質なアウトプットはありえないと考えています。さらには、言語習得論において、インプットの重要性は広く認識されています。教師が良い英文とはどんな英文なのか、語彙を含めこれぐらいのレベルで書いて欲しいと三年間訴え続けることで、生徒の英語力も成長していくのだと考えています。実際、受け持っている3年生に「この二つの英文を比較して、先生が書いた英文の方が良いと言うなら、なぜ良い英文なのか分析してください。」と投げかけると、3年生は「接続詞（and, so）が使えている」「文のつながりが自然で、犬への思いが伝わる」「どう感じているか、感想がきちんと入っている」「alwaysなどの副詞が使われている」と、私が良い英文として伝えてきたことをすべて言えました。

●3 英語を『伝える道具』に変える

言語は「受信」と「発信」の循環でしか育ちません。英語を自分の発信道具と感じさせるまでには、長い時間のインプット活動が必要になります。ですがそこまで成長した生徒は、英語という教科を「正解を当てる教科」ではなく、「考えを伝える手段」として使い始めるようになっていきます。多少の誤りを恐れず、自分なりの言葉で発信しようとする姿勢が生まれ、読む・聞く活動においても目的意識をもって英語に向き合うようになります。すぐに結果が出るものではありませんが、指導を続けていると2年生の2学期くらいから、変化が見られる生徒が出てきます。大事なことは、不完全でもいいから『使わせる』ことです。良い英文を示し続けることは、単なる添削ではありません。それは、生徒に「英語とはこういうふうを書くものだ」という感覚を育てる営みです。



今回は、この発想をもとに、2年生で行っている日記指導の実践を紹介します。

■秀学社は中学校の英語教材を発行しております。教材についてご要望がございましたら、秀学社HP「お問い合わせフォーム」まで、ぜひお知らせくださいませ。

秀学社HP

<https://www.shugakusha.co.jp>

